



編集月旦 2016年2月号

★桃も李も、ものを言わない。けれども花が咲き実がなれば、樹下には人びとが訪れておのずから小径ができる。司馬遷は、『史記「李將軍列伝賛」』で、將軍の李広が鄙びた風姿のままで、また能弁でもなかったのに、何事にも誠実に尽くして親しまれて、その死がみんなに哀悼されました。その

ことを「桃李不言、下自成蹊」に託して記しています。

☆品格が優れて着々と実績を積んでいる人のもとには、おのずからみな慕い寄ってくるものだということです。安倍晋三少年が学んだ成蹊学園の建学の精神です。首相として、平和でみんなが親しかよう径を歴史に残すことができるのでしょうか。

★日本の春の花は淡いですが、中国の春の花はどれも色濃くあざやかです。その中でもとくに桃は明るい。春の光をあびて柳が緑の陰をつくり、桃をはじめ百花がいっせいに開いて明るく輝いているようすが「柳暗花明」（王維「早朝」など）です。唐の詩人王維は春の盛りを率直に詠じていますし、宋の陆游の「柳暗花明又一村」（「游山西村」から）では桃の紅、柳の緑のあいだを詩人がゆったりと動くようすを伝えています。

☆また「柳暗花明」は、比喩的には逆境の中で急に転機がおとずれて希望が開ける状況になることに似ています。いい結果をさがしている原油価格、株式市場、シャープの再建などさまざまな場面があってよく用いられます。

★ところで「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」（劉奇夷「代悲白頭翁」から）の花は桜ではなく、唐の東都洛陽の城東に咲き誇った桃李でした。花は年々変わりなく咲くけれど、むかし「紅顔の美少年」も、いまは白頭の翁に変わってしまった、と遠い日に思いを馳せて「人同じからず」と時の過ぎゆきを省みているのです。もちろん花の下に集う人びとも年々変わっていきますので、日本では春の人事異動や入学・入社式に頃合いの華やぎのあるあいさつとしてよく引用されています。

☆実は「花も同じからず」で、いま「花城」といわれる洛陽の春に咲き誇るのは大輪の牡丹です。4月中旬の「牡丹花会」には全土から花見客が訪れるようです。

★桃花は「桃李不言」「年々歳々」「柳暗花明」で登場しますが、本命の「桃源郷」に触れないわけにいきません。いわゆる理想郷としての「桃源」です。東晋の陶淵明の『桃花源記』に描かれた世に隔絶して存在する美しい小村で、「世外桃源」（孔尚任『桃花扇「帰山」』など）と呼ばれています。おだやかな山水に囲まれ、桃の花と果実を楽しみ、農業を生業としていて、秦の騒乱を避けたあと五〇〇年余ものあいだ世に知られずにいました。そういう小世界はいまもどこかに存在しつづけているにちがいないのです。

★桃原があるからといって桃源郷とはかぎりませんが、『桃花源記』に由来する仙境「桃源郷」は湖南省常德市の桃花県がモデルとされ観光地になっています。日本の「桃源郷」といえば山梨県笛吹市でしょう。笛吹川の扇状地に日本一の「桃の里」が広がっていて、春先に桃畑は「ピンクの絨毯」となって季節を謳歌します。2016年の「笛吹市桃源郷春まつり」は3月21日（祝）から4月24日（日）までです。桃原を訪れて、そこでわが心の桃花源を思うのは、命を延べる行楽のひとつでしょう。

☆桃の人に篠田桃紅さんがいて、百寿長命の証になってくれています。

（連載web 円水社+「四字熟語の愉しみ」から）

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり、高齢者の課題であり、本誌の目標です。（編集人記）

